

# Colors in Korea

MITSUBOSHI Muneo

Key words: Korea, color, Busan, Gyeongju, ecology

## Abstract

Color data were collected on the nature, the streets, the street furnitures, the public toilets and some commercial goods in Busan, Gyeongju, and Seoul, Korea from March 7 to 11, 2010. The plants there were found quite similar to those in Japan. Among those the pine trees in the temples gave us almost identical atmosphere as in Japan. Many commercial goods, including even milk, have been found in green or yellow-green packages, which clearly appeal their ecological treatment. The green package of milk is very rare in Japan.

A great variety of the text book on color were found in a book shop in Seoul, especially those on fashion. This reflects, it seems to the author, that Korean Government strongly puts forward the Korean fashion to the world, expecting Seoul to be the center for the fashion in Asia.

## 韓国色彩事情

三 星 宗 雄

### はじめに

図1は岡山県瀬戸内市牛窓町紺浦地区に伝わる唐子（からこ）踊と呼ばれる踊りである（読売新聞 2010 年 4 月 8 日）。学内共同研究「世界の色の記号に関する実証的研究—自然・言語・文化の諸相—」に関連して調査を進めていく過程で、わが国の本土と沖縄（琉球王国）との文化的つながりおよび沖縄と中国（福建）とのつながりについて学んだ（三星、2008；2010a；c）。しかしこの新聞記事を見た時の衝撃ほどではなかった。この「唐子踊」を見て、少し大げさな表現をするなら、軽い胸騒ぎを覚えたのである。数百年の時を超えて異国の文化がわが国の地方にしっかりと刻まれているのだ。この朝鮮通信使と呼ばれる一行は江戸を越え、時に遠く日光にまで到達しているという（読売新聞、2010 年 3 月 29 日）。筆者の胸騒ぎはその文化的つながりの深さから来ていたと思う。自分たちの心の中に潜む文化のルーツをあらためてほじくられるような気持ちを感じた。唐子踊を演ずる 2 人の子供たちのあどけなさがそれを倍増させた。2 人の子どもたちは過去の歴史については何も知らないに違いない。しかし一種の文化の「圧」としてそのような踊りを演じ

日韓 きずなの旅 ⑧

見聞録  
2010



岡山県の瀬戸、瀬戸内市牛窓町の紺浦地区に奇妙な踊りが伝わる。「唐子踊」という。毎年10月の秋祭り、地区の氏神、安神社の境内などで、ふたりの稚児が踊り舞う。週末の夜、集落の集会所に練習風景をのぞいた。真田隆巳君と近成和君(ともに7歳)が異国風のきらびやかな衣装、帽子姿で、大人たちの太鼓と横笛に合わせ、くりり、ひらりと踊り始めた。私もうたれて踊り出す。ふたりのかわいい口上。「こんねん はじめ、にほんへわたり にほんのみかとは おちりません ません ごろう よかん

通信使との縁 感じる踊り



独特の所作を伝える牛窓、紺浦地区の「唐子踊」(3月1日、岡山県瀬戸内市) 撮影 菅原 孝雄

(ごう) しょうん おんれいもす。海外からの使館のあいさつを思わせる。明、と首をかしげる。市教育委員会の保存担当者也、「江戸時代末期に復元させた」という記録はある

王子に舞わせたのが起源だ、との伝えもある。しかし、唐子踊保存会の小竹正賢会(54)は、「戦前の皇国史観によるじつけしよ」と信じない。1990年春、保存会長だった柴田清志さん(71)「朝鮮通信使の町」として観光客誘致を始めた長崎県厳原町(現・対馬市)から電話が入った。「8月のアラン祭りの行列で唐子踊の一行に出てもらえないか」。牛窓と朝鮮通信使のかかわりが広がるきっかけとなった。翌年から、厳原町から衣装を借りて地区で通信使行列を再現。やがて牛窓秋祭りのメイン行事となった。2003年には釜山での日韓交流行事に参加して唐子踊を披露した。今年10月ソウルでの交流行事に招待されている。牛窓、古代から瀬戸内の重要な風物(ふうぶつ)として発展(編集委員 半恵一郎)

図1 唐子踊(岡山県瀬戸内市牛窓町 読売新聞2010年4月8日)

させられるのである。

本誌は残念ながら白黒印刷なので子供たちの衣裳の色彩については伝えられない。子供たちの衣装は黄色い縁取りのある赤色の上着に鮮やかな青のズボンである。太い胴巻はピンク、茶色の帽子、おそらくは帽子を押さえるためのハンカチーフは黄色である。子どもたちは化粧をしているが2人とも男の子とある。

2010年3月7日から11日まで、上記学内共同研究から一部旅費の助成を得、韓国で色彩の調査を行った。同行したのは共同研究のメンバー4人であった。メンバーの一人の「韓国人が黄色の色が好きなのは春に全土一面に咲くレンギョウ（図2）から来ているのではないか」という仮説を確かめるというのが動機の1つであった。その時期日本だけでなく、韓国も大雪に見舞われ、残念ながらレンギョウの黄色い花はごく一部でしか見られなかった。

しかし筆者には別な目的があった。それは色彩についても日本文化のルーツが韓国にあるのではないかという期待であった。これについても筆者に十分な予備知識がなく、目立ったつながりを示すデータを得ることはできなかった。今後の課題とするばかりである。

## 植栽・自然

その地域の植栽は予想以上にその地域の印象を訪れる人に植え付ける。筆者がこの共同研究のテーマを意識して初めて沖縄を訪れた時、熱帯・亜熱帯の違いはあるが明らかにアマゾン流域とは異なり、わが国とのつながりを強く意識したのは松の木（リュウキュウマツ）とススキの存在であった（三星、1993；1994；三星、2008）。また沖縄と中国福建沿岸部とのつながりを感じたのはガジュマルの共有性であったし、逆に違い

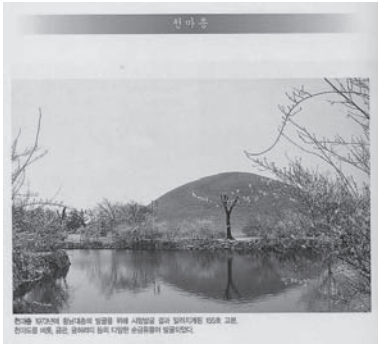


図2 レンギョウ（大稜苑 慶州ハングブックから）

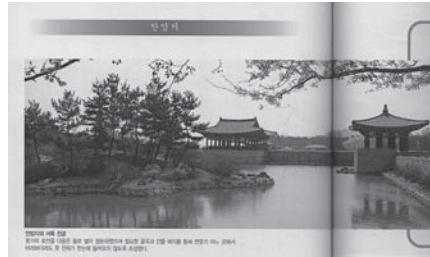


図3 松・桜・ツツジ（レンギョウも）（鴈鴨池 同）

を意識したのは福建沿岸部に松の木と桜の木が、少なくとも筆者が観察した限り、見られなかったことだ（三星、2010a）。

その松はここでは遍在しており、一瞬にしてわが国とのつながりを感じざるを得なかった。早春ということもあって、花はあまり見られなかった。しかし季節になるとレンギョウや桜が咲きほこるのであろう（図2、3）。レンギョウは慶州の花である。ちなみに慶州の花は松である。また韓国の国花はムクゲ（韓国名 無窮花）である。図3からすると、桜はソメイヨシノに似た淡いピンクの花だ。竹はあまり見なかった。草については早春の上、雪が降ったこともあり残念ながら観察できなかった。もしあぜ道にタンポポやスイバなどを見ることができれば（おそらくそうであろう）、植栽環境はほとんど同じだと言う他ない。

## 空港・建築・ストリートファニチュア・街並み

よく知られているように、釜山は人口400万の韓国第2の都市である。港湾都市という点でも横浜に似た印象がある。旅先では最初に必ず玄関口の色彩を見るようにしている。空港、駅あるいは港にその都市の色彩



図4 釜山空港

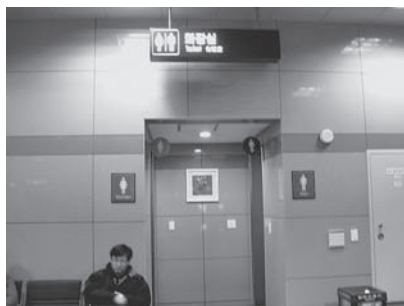


図5 トイレマーク（釜山空港）



図6 緑色のトイレマーク（仁川空港）



図7 各種の地図サイン 右上に青色ボディに赤色ハットの高速1号線のサインが見える（慶州案内から）。

についての意識が尖鋭化して表れていることが多いからである。釜山空港はヒースロー空港のように、黄色地に黒といった非常に明視性の高い（高過ぎるほどの）サインではなく、青地に白文字のすっきりとしたサインであった（図4）。しかもそれほど多くがぶら下がっていない。どちらかと言えば米国の空港に近い色彩である。韓国は色彩に関しては米国志向のように思われる。高速道路の番号表示は（少なくとも高速1号線は）米国の高速（Inter-State）の表示とほぼ同じ色彩・デザインであった（図7）。

図5は釜山空港内のトイレである。通路から見えるトイレマークは男

女とも青地に白の統一されたものであったが、一歩中に入ったところに男女で赤青の色の区別があった。このように外と内とで色彩が異なるのは今回が初めてであったが、色彩のユニバーサルデザインと自国の文化とを融合させる1つの方法かも知れない。

目を引いたのは帰途についた仁川空港内のものである（図6）。男子用のマークが緑色（厳密には黄緑色）であったのである。わが国では青色や黒が普通であり、緑色はあまり見ない。その思想的背景は今明らかにできないが、後述するように韓国では現在エコの取組みに色彩を動員している印象があるので、もしかしたらその反映だろうか。

トイレに関して続けると、さすがにホテル内のトイレは重厚なものであった。金色地に黒と言う男女で統一された色彩であったが、それ以上にそのデザインが目を引いた（図8）。韓国の伝統的な衣装に身を包んだ男女のデザインであった。以前にも書いたが（三星、2010a）、こうした細部にアート性の高いデザインを見るのは一瞬現実からの遊離を引き起こし、ある種のこころのリセットにつながるのではないかと思うのである。

図9は古都慶州駅の公衆トイレである。そのデザインの重厚さ、白と暗いグレーを基調とした色彩はまさに古都の名にふさわしい。またトイレマークはどこまでも小さく、明らかに色彩への高い意識を感じさせるものだ。ちなみに慶州駅の駅舎を図10に示す。シンプルそのものであるが、凜としたそのデザインは人々の心を落ち着かせる。屋根の一部に緑色（厳密には黄緑色）が用いられており、また駅舎内の表示板には青色となっているのが見える。どうも韓国のキーカラーは緑色と青色であるように思われてならない。

さて図11はホテルの窓から見た釜山の街並みである。建物のデザインが統一されているとは言えないが、しかし建物の屋上にあるタンク



図8 ホテル内のトイレ（釜山）



図9 慶州駅の公衆トイレ



図10 慶州駅の外観 屋根の底の部分は  
緑色である。



図11 釜山の街並み



図12 青色の公衆電話ボックス（釜山）



図13 那覇の街並み



図 14 西条市（広島）の街並み



図 15 マクドナルド（ソウル）

（おそらく水の）はすべて青色で統一されていた。同じ会社の製品かも知れず、その場合には当然と言えば当然なのだが、しかしそれ以外にも青色が明らかに意図的に用いられている建物やストリートファニチャーも見られた（図 12）。これは以前紹介した英国 Working 市の街の色彩計画と似て、建物の部分にある統一された色彩を用いる手法である（三星、2010b）。わが国では那覇市が沖縄赤瓦の色で街並みの色彩の統一を図っている（図 13）。また西条市（広島）では特産の赤土からできるやはり赤瓦を基調としている（図 14）。街中にポツンポツンと散在する色彩になるが、街の全体的な印象としては明らかに違うのである。このように、街全体を同じ色で塗りつぶす必要はなく、街に住む人々または街を通過する人々が、普段予想する確率より多少高い確率で統一された色彩を見せること。これが街の色彩計画の第一歩であり、ひょっとしたらこれで十分なのかも知れない。

しばしば美とは変化（多様性、複雑性）の中の統一（秩序、単純性）と定義される（Birkoff, 1933）が、その具体的な実現なのではあるまいか。

マクドナルドの看板については触れなければならない。空港や駅などともに、マクドナルドの看板の色彩もその地区の色彩に対する熱意を測

るある種のバロメーターであるからだ。1985年東京世田谷区で起きたマクドナルドのネオンサインをめぐる事件は「騒色公害」の言葉を生み、わが国に周囲の調和を破る色彩への関心を一気に加速させたのである。ちなみに三星（2006）はマクドナルド事件とともに、東京都バス事件（1981）および高崎ビックカメラ事件（1986）を合わせて「三大騒色事件」と呼んだ。

図15のマックはソウルの中心街にある店だが、マックの企業カラーである赤、白、黄色のうち特に「騒々しい」赤色が抜かれている。そこに色彩に対する高い意識が表れている。また階下の落ち着いた青色のスターバックスの色彩もすばらしい。

図16は釜山市内で見た幼稚園である。幼稚園の園舎はわが国でもかなり鮮やかな色彩であることが多い。しかし図16のような、ビビッドで多色のものはあまり見ない。韓国の幼稚園はかなり激しい色を用いるものだと感心したが、近づいてよく見ると「華僑幼稚園」であった。やはり中国の色彩は一味違うものだ。しかしこの幼稚園のメインなカラーは青色であった。緑色（黄緑色）もしっかりとある。

ソウル中心部の清溪川についてはわが国のマスコミ等で報道されたので、ご存知の読者も多いであろう。現在の李明博大統領がソウル市長だったころ、市内の中心部を走る高架道路を撤去し、そこに清溪川を復活させたのである（写真17）。深さは20センチほどであろうか。水の流れるのはかなり急であり、中に人工の滝なども設けられていた。当日は寒く、前の日の雪がところどころに残っており、とてもゆっくり散策するような状態ではなかったが、今ごろ（5月）や夏には多くの人が繰り出すに違いない。



図 16 華僑幼稚園（釜山）



図 17 復活した清溪川（ソウル）

## エコカラー

20 年ほど前にファッションの世界などでエコロジーカラーという流行色の時代があった。茶色や暗めの黄色、緑色がそうであった。これらのアースカラーとも言うべき色によって自然回帰を連想させた。しかし最近のエコカラーは地球温暖化（防止）とのつながりから明るい黄緑色であることが多い。おそらく二酸化炭素を吸収してくれる植物の葉をイメージしているのであろう。

この報告を通して伝えたい第 1 の韓国色彩事情はこのエコカラーとも言うべき緑色（厳密には黄緑色）の進出である。ファミリーマートは、米国の砂漠で生まれたローソンなどと異なり、わが国で生まれた数少ないメジャーなコンビニで、元来が自然を意識して設立されたものであるため、看板に緑色が用いられているのはうなずける（図 18）。しかし地下鉄内の自販機や案内表示板にも緑色が溢れているのが図 19 と 20 から



図 18 ファミリーマート（釜山）



図 19 地下鉄内の自販機（釜山）



図 20 地下鉄内の案内表示板（同）



図 21 植物油（同市内スーパーで）

分かる。

その中で何と言っても驚くべきは、スーパー内の商品である。緑、緑、緑、みどりのオンパレードなのである。洗剤やラップ、電気器具類など家庭用品は言うに及ばず、ジュースや牛乳パックにまで緑色が及んでいるのだ（図 21～29）。

5 年ほど前にわが国で赤色の牛乳パックが売り出された。それまでは牛乳パックの色彩と言えば白色か青色と相場が決まっていた（佐藤、2010）。赤色パックを発売した会社は当時ある事件を起こし、一時営業停止に陥った後の再出発であった。みそぎのメッセージがあったのかも



図 22 紙食器 (同)



図 23 電氣器具 (同)



図 24 ラップ (同)



図 25 文房具 (同 左下に緑色の伝票集が見える)



図 26 洗剤 (同)



図 27 トイレットペーパー (同)

知れない。発売当初は違和感があったが、スーパーなどでの観察によると、売上げはそれほど悪くなさそうだ。

しかしわが国では大面積で緑色の牛乳パックはあまりない。せいぜい



図 28 ジュース (同)



図 29 牛乳パック (同)

ほんの一部に見られるに過ぎない。牛乳と緑色との結びつきはどうしても牧場を連想させる。牧場の草は近づいて良く見ると、案外汚い。しばしば牛の糞まみれの場合もある。そんなところから敬遠されているのかも知れない。

確かに飲料物のパッケージは牛乳に限らず、水を連想させる青色や水や雪を連想させる白色が圧倒的に多い。天然水や新海水もそうである。

しかし韓国では堂々と全面的に緑色の牛乳パックが売られているのだ(図 29)。この背景については残念ながら今明らかにできない。むしろ日本人の青色偏好が奇異なのかも知れない。あるいは韓国人の黄色嗜好が、純粋な緑色ではなく黄色が多少混じっている黄緑色に表れているとも考えられる。また韓国の牧草はきれいである可能性もある。

緑一色とは言え、さすがに食料品すべてが緑色で覆われているわけではない。図 30 は味噌のパッケージ、図 31 はお米の袋である。味噌のパックの色彩は中身を連想させるが、お米の場合はどうだろうか。このようかなり鮮やかなオレンジ色の袋はわが国ではあまり見られないのではないか。わが国では青色や、むしろ緑色（および白色）が多いように思われる。



図 30 味噌 (同)



図 31 お米 (同)



図 32 仏国寺 (提灯の色に注意。慶州にて)



図 33 トイレ (デザイン、色彩ともにすばらしい。門まで備えられている。同寺)

## 寺院に見られる緑色

これはエコの思想とは関係ないと思われるが、寺院に緑色が案外多い。図 32 は古都慶州で訪れた仏国寺である。図 33 は境内のトイレである。いずれも庇や横木にふんだんに緑色が使われている。中国の寺院にも赤と緑の極彩色のものが多い (三星、2010a)。邪気をさえぎる護符の意味があると言われる。面白いのは提灯までもが緑色なのである。中国では赤であることがほとんどである (図 34)。ただ残念ながら点灯した時の



図 34 美人の寺・南普陀寺（中国 廈門）

色は分からない。

## 色彩のテキスト

4 日目に同行メンバーのそれぞれの専門に関連するテキスト（教科書）の調査のためにソウルの書店に入った。非常に大きい書店で、店内で迷うほどであった。筆者は色彩の観点から、それに関連する本のコーナーへ向かった。そこにはわが国では考えられないほど多種多様の色彩テキストが並んでいた。おそらく 100 種類以上はあったと思われる。中でもファッションの色彩が目をつけた。

韓国は最近ニューヨークコレクションを主催する米ファッションデザイナー協議会とパートナーシップを結び、両国にデザイナーの発表の場を設けることで合意した（読売新聞 2010 年 4 月 24 日）。わが東京はアジアにおけるファッションの発信基地と目されているようだが、最近では低迷している。さすがに政府もファッションを経済産業省が策定した「文化産業大国戦略」に盛り込み、テコ入れを考え始めているようだ。しかし韓国はすでに着手しており、このままではソウルが東京に代わっ



図 35 左は J.P. ランクロの『色彩の地理学』の韓国語訳、同右はオリジナルなテキスト



図 36 韓国人著者による色彩テキストの中身

て、アジアにおけるファッションの発信拠点となる日が見えてきそうだ。

そのような事情もあり、色彩テキストは充実していた。残念ながら韓国語が読めないのでも間違っているかも知れないが、わが国の各種検定試験に似た試験なども行われているようだ。英語の併記があり、多少とも中身を推し量ることのできるテキストを購入した。それを図 35 と 36 に示す。図 35 (左) はフランスの著名な色彩デザイナー J.P. ランクロの『色彩の地理学』の韓国語訳本である。図 35 (右) は韓国人著者（もしかしたら高名な方かも知れない）のオリジナルな色彩テキストである。図 36 はその中身である。特に具体的なサンプルとしてカラー図版がふんだんに用いられているさまはすばらしいの一言である。筆者は専門上色彩関連図書にはできるだけ目を通すようにしているが、ランクロの『色彩の地理学』の日本語訳は見たことがない。また図 36 のようなオリジナルな色彩テキストも簡単には思いつかない。しかも価格が非常に安いのである（図 35 の翻訳本は約 1,300 円、オリジナルなテキストは約 1,000 円である）。

## 墓

これは色彩とは直接関係ないが、墓について触れておきたい。沖縄の墓は日本本土とはデザインがまったく異なっており、亀甲墓と呼ばれる（図 38）。そのデザインは風水思想から来ていると言われる（高良・田名、1993；赤嶺、2004）。これと非常によく似た形の墓が風水思想の輸出元である中国福建にも見られる（海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会編、2008；三星、2010a）。一方韓国も風水思想の洗礼を受けており、墓のデザインについて確認することは今回の調査の目的の1つであった。

韓国における墓は図 37 にあるように見かけ上は盛り土をただけの饅頭型であった。確かにわが国とはまったく異なっており、どちらかと言うとやはり沖縄や中国福建などに見られるものと通じる形状である。沿線で見た墓群は必ず丘や林の南面の日当たりのいいスポットにあり、裏側の日当たりの悪い面には影も形もなかったことからすると、やはり風水の思想が浸透しているのであろう。シーサーもある（図 39）。デザイン的には上の図 2 で見た古代新羅王朝の歴代王の墓と同じである。現代の一般国民の墓はいわば古代新羅王朝の王の墓の小型版であり、それが1500年前からずっと受け継がれているのだ。日本本土の墓が天に向かって屹立する男性的なデザインなのに対し、沖縄の亀甲墓はむしろ横に広がる女性的な形状である。風水ではそこは明らかに女性をイメージしていると言う（赤嶺、2004）。しかし昔はいざ知らず、現代の亀甲墓はコンクリート製のかなりごつい印象がある。しかもかなり巨大である。それに引きかえ現代の韓国の墓は何ともやさしく、愛おしい印象である。ますます女性的な形状である。図 37 はおそらくご夫婦の墓なのであろ



図 37 韓国の墓（慶州にて）



図 38 沖縄に見られる亀甲墓（平安島）



図 39 シーサー（釜山）

う。静かな、安らかな眠りを感じざるを得ない。

## おわりに

韓国の人々の感性は霜の中に咲く菊、雪の中の桃の花、風に揺れる松と竹、池の泥から現れるハスの花だという (Nahm, 1989)。レンギョウやツツジ、それに桜なども含めてわが国で見ない花はない。菊などは日本だけが特別に愛でているものと勝手に思っていたが、文字通り勝手な思い込みであることが分かった。

これだけ自然あるいは植栽あるいは花の環境が似通っているのであるから、日韓の色彩に対する感性も似通っていると考えるのは自然であろう。ところが本稿で述べたように、必ずしもそうとは言い切れない。住居やお墓のデザインは別としても、現在のエコカラー、寺院の色彩、黄色や白に対する偏好（韓国）と青色に対する偏好（日本）、国花（再生を象徴するムクゲと散り際を意識した桜）に対する感情などはかなり違うと言うべきである。

最近の車ら（2010）の各グループほぼ70人を対象とした大規模な嗜好調査によると、韓国人が好む色彩の上位5色は白、鮮やかな（vivid）緑、鮮やかな黄色、鮮やかな青、鮮やかな紫であった。一方日本人は白、鮮やかな青、鮮やかな緑、黒、うすい（pale）黄色であった。面白いことに日本滞在の韓国人はその中間的な結果であった。やはり鮮やかな黄色（韓国）と鮮やかな青（日本）に対する嗜好の高さが見られる。

しかし、である。今回の調査を通して、筆者には上に挙げた違いはいわば誤差であり、日韓の感性全体として見るなら、やはり同じ世界に住んでいると強く感じざるを得なかった。実際車ら（2010）の調査においても、両国とも嗜好色の第一位は白であった。今後日韓の色彩に対する感性について具体的に明らかにしていきたいと思う。

## 謝辞

今回の調査を遂行するにあたり、神奈川大学共同研究「世界の色の記号に関する実証的研究—自然・言語・文化の諸相—」から旅費の補助を得た。ここに記して感謝したい。

## 引用文献

赤嶺守（2004）『琉球王国』、講談社。

Birkhoff G. D. (1933) Aesthetic Measure. Cambridge, Mass: Harvard Univ. Press.

ハンドブック慶州 (2008)

慶州市 (2009) 観光案内『慶州』

三星宗雄 (1993) アマゾンメモ—色彩・環境・熱帯雨林—、神奈川大学人文研究 119, 43-63。

三星宗雄 (1994) アマゾンの色彩：その測色学的研究、神奈川大学心理・教育研究論集 13, 76-96。

三星宗雄 (2006) 『環境色彩学の基礎』、マックローリン出版。

三星宗雄 (2008) 沖縄の色、神奈川大学人文学研究所報 41, 23-32。

三星宗雄 (2010a) 中国福建沿岸部の色彩と景観、神奈川大学人文研究 169, 1-23。

三星宗雄 (2010b) ロンドンの色彩、神奈川大学人文研究 170, 1-21。

三星宗雄 (2010c) 一般市民から見た沖縄の色—那覇市および近郊における聞き取り調査—、神奈川大学人文学研究所報 43, 1-11。

Nahm, A. C. (1989) A Panorama of 5000 Years: Korean History, 2<sup>nd</sup> ed., Hollym.

佐藤友里子 (2010) 牛乳パッケージの配色効果について—パッケージの違いによって、購買効果は変化するのか—、2009 年度神奈川大学人間科学部卒業論文。

車貞玖・横田正夫・三星宗雄 (2010) 韓国人、日本人、および日本在住韓国人を対象とした色彩選好と思考スタイルとの関連性、神奈川大学人文学研究所報 43, 13-24。

高良倉吉・田名真之編 (1993) 『図説 琉球王国』、河出書房新社。

海のシルクロードの出発点“福建” 展開催実行委員会編 (2008) 東アジアの海とシルクロードの拠点 福建—沈没船、貿易都市、陶磁器、

茶文化一。

読売新聞（2010年3月29日）

読売新聞（2010年4月8日）

読売新聞（2010年4月24日）